センター試験の概況①

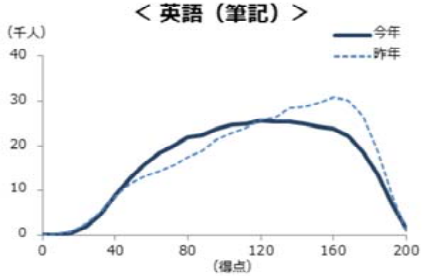
● センター試験平均点

教科・科目			昨年	今年	差
英語（筆記）			123.3	117	-6
英語（リスニング）			31.4	29	-2
数学		数学Ⅰ・数学A	59.7	52	-8
		数学Ⅱ・数学B	53.2	49	-4
国語			121.6	119	-3
理科	①	物理基礎	30.6	33	+2
		化学基礎	31.2	28	-3
		生物基礎	31.0	32	+1
		地学基礎	29.6	27	-3
	②	物理	56.9	60	+3
		化学	54.7	55	±0
		生物	62.9	58	-5
		地学	46.3	40	-6
地歴		世界史B	65.4	63	-2
		日本史B	63.5	65	+1
		地理B	62.0	66	+4
公民		現代社会	56.8	58	+1
		倫理	62.3	65	+3
		政治・経済	56.2	54	-2
		倫理，政治・経済	64.2	67	+3
総合型		５－７文系型	569	548	-21
		５－７理系型	571	553	-18

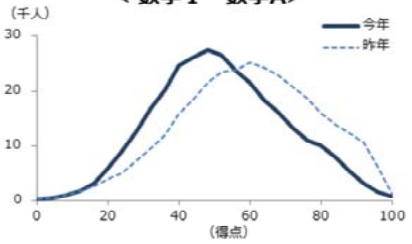
※７科目文系型（900点満点）：外・数（2科目）・国・理・地公（2科目）
※７科目理系型（900点満点）：外・数（2科目）・国・理（2科目）・地公（理①は2科目を1科目とみなして集計）
※今年の数値は河合塾予想、総合型は両年とも河合塾推定

● センター・リサーチ参加者の科目別得点分布

＜英語（筆記）＞



＜数学Ⅰ・数学A＞



左の表は、センター試験の科目別平均点（2020年度は河合塾予想）である。

今年のセンター試験では、英語、数学、国語の主要科目で平均点がダウンした。

なかでも、数学Ⅰ・数学Aは前年から－８点と難化しており、現行課程に移行した2015年以降最低点となる見込みである。右下の得点分布をみると、今年の分布は高得点層が減少し左にシフトしている。より思考力を重視する問題や従来の過去問題や問題集等ではあまりみかけない設定の問題など、受験生にとって慣れない問題が出題されたことから高得点が取りづらかった様子がうかがえる。

理科①では、化学基礎、地学基礎で３点ダウン。理科②では、物理でアップした一方、生物、地学ではダウンした。

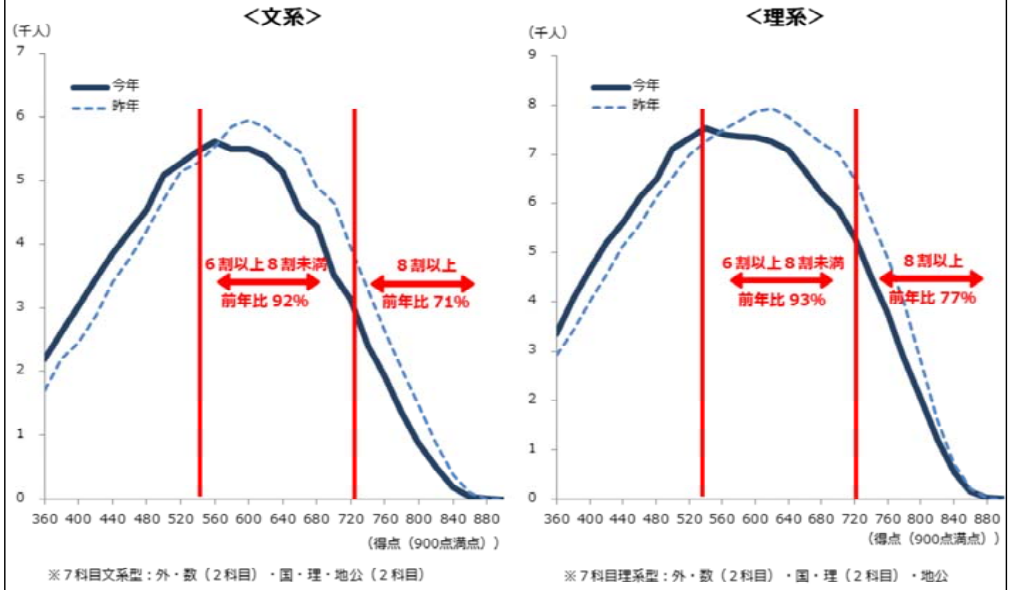
地歴・公民では、若干の変化はあるものの、とくに地歴、倫理,政治・経済の４科目では平均点が６３～６７点と大きな差はなく、選択科目による不公平感は感じられない。

なお、理科②、地歴・公民とも得点調整はないと見込んでいる。

５教科７科目の総合型では、主要科目の平均点ダウンにともない、文系・理系とも２０点前後ダウンすると推定。

センター試験の概況②

● センター・リサーチ参加者の７科目型得点分布



国公立大志望が中心となる７科目型受験者の文系・理系別の得点分布（※）。

文系・理系ともに分布の山は左にシフトしている。

とくに、難関大を狙う得点率８割以上の高得点層が大きく減少している。

数学Ⅰ・数学Aをはじめとする主要科目では、平均点がダウンしただけではなく高得点がとりづらかったことが要因と推測する。

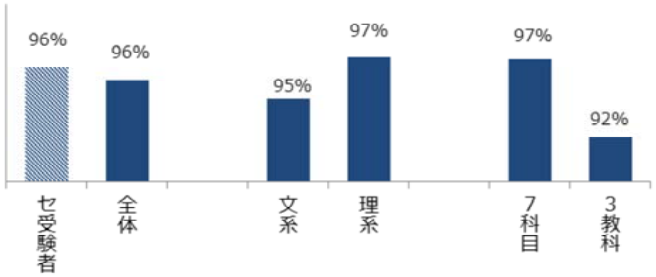
理系では、選択者の多い物理や地理Bで平均点が上昇した影響で、得点率８割以上の高得点層の減少率は文系ほど高くない状況である。

以上から、今年のセンター試験は①平均点ダウン、②高得点がとりにくかったの２点が特徴である。

※得点分布は河合塾 センター試験自己採点集計「センター・リサーチ」のもの

【センター・リサーチ】参加状況

● 参加者数 ４１８,００４人



※セ受験者はセンター試験外国語受験者数　※文系・理系は本人のマークによる
※表中の数値は前年比

● （参考）センター試験の状況

		昨年	今年	前年比
志願者数		576,830	557,699	96.7%
	現役	464,950	452,235	97.3%
	既卒等	111,880	105,464	94.3%
外国語受験者数		538,603	519,303	96.4%
	(受験率)	(93.4%)	(93.1%)	

※大学入試センター資料より

センター試験受験者から寄せられた河合塾の自己採点集計（センター・リサーチ）の概況をまとめた。

今年の「センター・リサーチ」の参加者数は418,004人、センター試験受験者の約８割をカバーする（センター試験受験者は本試験「外国語」受験者とする）。

データ件数は前年比96%と、センター試験「外国語」受験者と同様の減少率である。

文系・理系別では、文系の減少率がやや高い。

教科型別では、国公立大志望者が中心となる７科目型は前年比97%であるのに対し、私立大志望者が中心となる３教科型は92%と減少が目立つ。

大学入学共通テストへの移行を翌年に控え、早期に入学先を決定したいという安全志向から、2020年度入試では推薦・ＡＯ入試の人気が高まっており、推薦・ＡＯ入試での合格者が抜けている影響もあると思われる。

下の表は、センター試験の志願者数、受験者数をまとめたものである。

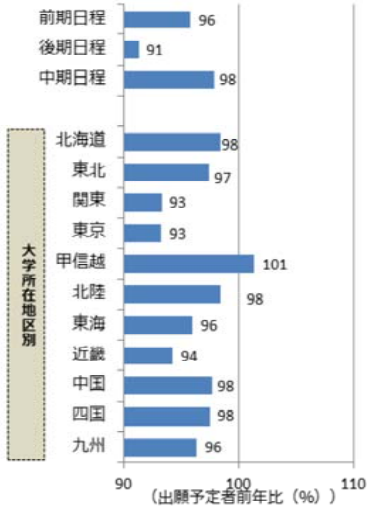
センター試験の志願者数を現役・既卒等に分けてみると、既卒等は前年比94%と高い減少率である。

現役生に比べて学力の高い生徒の多い既卒生の減少は、難関大や医学科の入試に与える影響は大きく、今年の入試のポイントの一つといえる。

©Kawaijuku Educational Institution.

国公立大の志望動向①（全体概況）

● 全体概況



● 大学グループ別

		全体			現役	既卒	女子
		昨年	今年	前年比	前年比	前年比	前年比
1	難関10大	57,447	54,748	95%	97%	84%	94%
2	文系学部	21,246	19,899	94%	96%	82%	94%
3	理系学部	34,416	32,842	95%	97%	85%	92%
4	その他	1,785	2,007	112%	117%	87%	105%
5	準難関・地域拠点大	46,664	43,977	94%	95%	85%	93%
6	文系学部	20,861	19,155	92%	93%	81%	92%
7	理系学部	23,588	22,758	96%	98%	87%	95%
8	その他	2,215	2,064	93%	94%	88%	88%
9	その他大	150,897	145,557	96%	97%	91%	96%
10	文系学部	66,404	63,337	95%	95%	94%	94%
11	理系学部	70,550	68,356	97%	98%	89%	96%
12	その他	13,943	13,864	99%	100%	90%	98%
13	国公立大計	255,008	244,282	96%	97%	87%	95%
14	文系学部	108,511	102,391	94%	95%	87%	94%
15	理系学部	128,554	123,956	96%	98%	87%	95%
16	その他	17,943	17,935	100%	101%	89%	98%

※難関10大：旧帝大・東工大・一橋大・神戸大
　準難関・地域拠点大：筑波大・千葉大・横国大・新潟大・金沢大・岡山大・広島大・熊本大・東京都立大・大阪市大
※「地区別」「大学グループ別」は前期日程で集計
※文系学部：文・人文、社会・国際、法・政治、経済・経営・商、教育　理系学部：理、工、農、医歯　その他：生活科学、芸術・スポーツ科学、学際

国公立大全体の志望動向をまとめた。

左の全体概況のグラフに目を向けると、

前期日程の出願予定者数は前年比96%と、センター試験受験者数の減少率と同率となった。センター試験の受験者数と連動した動きにより、競争の緩和が期待できそうな状況といえる。

後期日程は前年比91%と減少率が高い。今年のセンター試験は英語・数学・国語の主要科目で平均点がダウンしており、目標としていた得点に届かず、後期日程の出願を諦めようとしている受験生が前年以上に多い様子がわかる。

中期日程は、近年新たに実施する大学が増えており、減少率は小幅。

大学所在地区別にみると、関東・東京・近畿といった都市部での減少率が高い。

右の表は、大学グループ別に志望動向をまとめたものである。

「難関10大」「準難関・地域拠点大」「その他大」のグループ間に大きな差は見られず、極端に難関大を避ける動きはみられない。

ただし、グループ内では、前年倍率がダウンした学部・学科や、他大と比べてボーダー得点率が低く狙い目にうつるところに集中するケースがあるため、今後の動きに注目したい。

©Kawaijuku Educational Institution.

国公立大の志望動向②（難関10大学）

	北大 92	東北大 96	東大 96	東工大 92	一橋大 85	名大 96	京大 97	阪大 98	神大 95	九大 98
文 94	78	107	97			95	91	92	97	91
教育 92	94	74				99	99			98
外国語 104								104		
法 94	87	93	105		89	83	92	90	93	104
経済 90	94	103	82		87	94	94	85	86	104
経営・商 91					79				104	
理 99		100		99		107	92	101	92	100
工 97		97	99	90		93	102	106	93	95
								基礎工 95	海事科 107	芸術工 99
農 87		81	86			86	85		88	97
	水産 97									
	獣医 85									
医 93	83	83	101			98	96	92	93	98
歯 97	120	78						99		102
薬 97		102					81	98		104
保健 99	94	105				101	106	101	97	96
学際・他 99	総合文 129				社会 89	情報 112	総合人 126	人間科 99	国際人 102	共創 107
	総合理 91									

※表中の数値は前期日程の出願予定者前年比（%）　※保健は医学部のうち医学科以外の学科
※東大：文→文三、法→文一、経済→文二、工→理一、農→理二、医→理三　※東工大：工→理学院を除く全学院

難関１０大学の前期の状況をみていく。

図は、難関10大学の学部別の出願予定者前年比を示している。

難関10大学では、全大学で出願予定者が減少した。

なかでも、年間を通して低調な人気だった東京工業大、一橋大では、高い減少率となった。

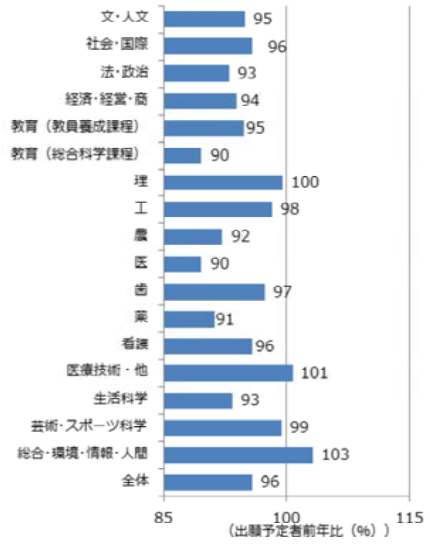
各大学の状況を学部にみると、全体的な傾向として前年入試で志願者が減少した学部（北海道-総合文系、東北-文、名古屋-理・情報、大阪-工、神戸-経営、九州-法など）や、他学部と比べてボーダー得点率の低い保健系などに出願予定者が集まっており、グループ内、大学内でもとくに合格可能性の高い学部・学科に集中している様子がわかる。

京都-総合人間は、出願予定者前年比126%と増加率の高さが目を引くが、

平均点がダウンしたセンター英・数・国を合否判定に使用しないこと、３年連続で志願者が減少したことから出願予定者が集まった。

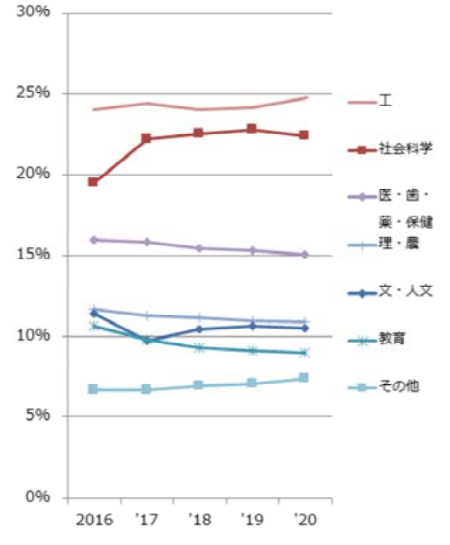
国公立大の志望動向③（学部系統別）

● 出願予定者前年比



※前期日程で集計

● 系統別出願予定者の占有率の推移



※各年度ともセンター・リサーチ出願予定者（前期日程）で集計
※社会科学：社会・国際、法・政治、経済・経営・商
その他：生活科学、芸術・スポーツ科学、学際

最後に、国公立大の学部系統別の動向をみていく。

国公立大前期日程の出願予定者数は４%減少（前年比96%）したことを踏まえてみると、
文系では、国公立大全体よりもやや減少率が高い系統が目立つ。
理系では、理、工学系は前年並みとなったが、医・薬などでは大きく減少した。
その他の系統では、学際系（総合・環境・情報・人間）が前年を上回る出願予定者を集めている。
なかでも情報分野では前年比113%と大きく増加しており、人気は継続している。

スライド右側の系統別占有率の推移をみると、
「医・歯・薬・保健」「教育」系は下降が続いている。
「社会科学」系は近年上昇が続いていたが、2020年度入試では下降した。

©Kawaijuku Educational Institution.